H-17　（個人発表　6 月 13 日(日)16:30～16:55　N331 教室）

ムスリム移民女性の就労実践にみる差異の交差

パキスタン系イギリス女性の事例から

Crossing Boundaries of Ethnicity and other Differences: the Work Experiences of British Pakistani Women

工藤正子（京都女子大学）

本発表の主な目的は、パキスタン系イギリス女性を事例に、ムスリム移民の就労実践にジェンダーと宗教・階層その他の差異がいかに交差しているのかを明らかにしたうえで、近年増加する高学歴のパキスタン系女性に焦点をあて、彼女たちが就労をとおして主流社会や、エスニック・コミュニティおよび自らの家族との重層的な関係性をいかに維持・再構成し、多文化化するイギリス社会において、どのような位置を築こうとしているのかを検討することである。

イギリスでは、第二次世界大戦後に旧植民地から受け入れた出稼ぎ労働者が世代を重ね、社会の多文化化プロセスに主要な位置を占めるようになっている。これらの移民人口の年齢構造は、高齢化する主流社会と比べて若く、本発表でとりあげるパキスタン系をみても、2001 年の国勢調査の結果では、20 歳未満の若年層が半数近くを占める。しかし、その社会経済的位置は、世代の進行とともに上昇しているとは必ずしもいえず、パキスタン系は2001年の国勢調査の結果においても、バングラデシュ系とならんで教育・就労における達成度の低さが際立っている。これらの二集団の社会経済的位置については、とりわけその女性の労働参加率の低さが問題化されてきた。その背景にあるとしてしばしば指摘されるのがイスラーム社会あるいは南アジアに見られる男女隔離の慣習であり、イギリスへの移住後も、女性の隔離がエスニック・コミュニティ内での親族集団の名誉につながることから、女性の教育や就労が抑制されるのだとするものである。

しかしながら、パキスタン系ムスリム女性の労働参加率の低さを「宗教」や「文化」にのみ還元するアプローチは、地域およびグローバルな経済変動や、それに伴う労働市場の再編成や格差の拡大、そして、移民に対する教育や雇用における差別などに起因する、女性たちの多重の周縁性を無視し、結果的には「移民社会の家父長制に抑圧されるムスリム女性」というステレオタイプを強化するものともいえる。こうした視点から、本発表ではまず、女性たちの就労を規定する複合要因の考察をとおして、パキスタン系イギリス女性の立ち位置に交差する複数の差異や力関係を明らかにしたい。

そのうえで本発表が注目するのが、パキスタン系女性の労働参加率の低さの一方で、高等教育に進み、専門職に就く層もでてきており、同じエスニック集団のなかでも分極化が生じていることである。第一世代と異なり、教育や雇用を通じて自らの親たちが形成してきたエスニック・コミュニティの外の世界とも関係をもつ女性たちは、ムスリムと非ムスリム、またはパキスタン系とその他のエスニック集団との境界を日々いかに往還し、それが彼女たちの就労実践および家族形成や自己像の再構築にどのように作用しているのだろうか。近年の研究においては、パキスタン系などのムスリム女性の一部が高学歴化し、経済力を獲得するにともない、彼女たちのあいだで、エスニック・コミュニティにおいて規範であってきた縁組結婚（arranged marriage）を拒否し、よりイギリスの主流社会の価値規範に同化する傾向があることが指摘されている。しかし一方で、女性たちの生き方を「近代的―伝統的」、または「主流社会のイギリス人と移民」といった二項対立的な枠組でみる見方に異議をとなえ、移民の若い世代の女性たちが社会経済的な上昇移動を遂げる過程において、ムスリムであることの自信を獲得し、現代的なイギリス人ムスリム女性（British Muslim Women）としての新たなライフスタイルを構築しているとする報告もでてきていることが注目される。本発表では、こうした先行研究を参照しつつ、発表者が2006 年以降にバーミンガム市を中心として行ってきた聞き取り調査の結果をもとに、就労を切り口として、多文化化が深化するイギリス社会における、ムスリム移民女性としての位置の交渉プロセスについて考察を行いたい。

【 パキスタン系イギリス女性、ムスリム移民、多文化社会、労働、ジェンダー 】